

## マタイ・ヨハネ受難曲におけるイエスの言葉「Du sagest's.」の訳について

2019.5.11 大改訂

### 【はじめに】

2017年3月、盛岡バッハ・カンタータフェラインの「ヨハネ受難曲」演奏会を聴いた。私にとって初めての字幕付き演奏会体験だった。

その演奏会、第18曲の字幕で、ピラトに「お前は王なのか？」と聞かれたイエスの台詞の訳は、

「お前の言うとおりに、私は王である」

というものだった。ドイツ語の歌詞はハッキリ「Du sagst's, ich bin ein König.」と聞き取れた。

私はこの瞬間、かなり違和感をもった。

私は「マタイ」は聴き込んでいて歌詞にも馴染みがあるが、「ヨハネ」には馴染みが無かった。なので、「ヨハネ」ではイエスの台詞にこんなのがあったのか、と思ったのである。

しかし同時に、「これは誤訳じゃないのか？」とも思った。字幕の、ではなく、ルターがギリシア語から訳す際の誤訳である。私は田川建三氏の本を読んで勉強していたから、歴史上実在したイエスはこんなことを言う人ではない、と理解している。イエスは、ユダヤ教指導者や政治権力者と、まともに同じ土俵で論争する気などさらさらなかった。「それはお前が言ってることだろ (Du sagst es.)」と、捨て台詞で応酬するのが、彼の基本姿勢なのである。

この演奏会後、この「Du sagest's.」問題に興味を持って、この論考の初稿を書き上げ発表した。

その後、所属する仙台宗教音楽合唱団 2018 年 8 月の演奏会でのシュツ「ヨハネ受難曲」の対訳、さらには、2020 年 5 月の山形・仙台・盛岡 3 団体合同のバッハ「マタイ受難曲」の対訳を担当することになり、必然的にさらに調べも深まった。そこで、この論考を推敲・大改訂することにした。

「マタイ受難曲」で出てくる 3 カ所の Du sagest's. (同福音書全体でもこの 3 カ所だけ) については、歌詞対訳はほぼ全て「お前の言うとおりにだ」と訳している。カール・リヒター指揮 1958 年録音盤に付けられた杉山好氏の訳「汝の言える如し」から何も変わっていない。当時、日本聖書協会による最新訳聖書は 1954 年『口語訳』で、そこでは「その通りだ」と訳されていた。杉山氏の訳もそれに準じたのだろう。

しかし、日本聖書協会はその後、1978 年『共同訳』、1987 年『新共同訳』、そして 2018 年『聖書協会共同訳』と、全て「あなたがそう言っているのだ」と翻訳している。もともとのギリシア語聖書がそう書かれているのだ。ということはこの訳でない、物語の筋書きが成り立たず、またキリスト教の教義としてもおかしいことになってしまうはずなのだ。

だが、礪山雅氏は大著『マタイ受難曲』で、現代でもドイツ語の口語では Du sagest's. を「その通りだ」の意味で用いる、と書き、氏自身の訳もそうしている。(英語の口語でも You said it. を同じ意味で使う。) しかし、これらの用法が何時から使われるようになったのかの検討が必要だろう。

ルター訳や欽定訳は、きちんとギリシア語原文通りに訳したのに、その後の伝統的かつ無反省なキリスト教社会が、「イエスは当然、神の子キリストなんだから、『その通りだ』と答えたに違いない」「イエスはユダが裏切者だと知っていたのだから、『その通り』と答えて当然だ」などと解釈し、その結果、Du sagest's. や You said it. が「その通りだ」の意味で使用されるようになったのではないかと私はそう考えている。

以下で私がやったことは、バッハの「マタイ」「ヨハネ」両受難曲にでてくる計 4 カ所 (両福音書全体としてもこの 4 カ所だけ) の Du sagst es. について、手元の様々な訳を検証してみたというだけである。

なお、その作業中、Wikipedia「マルコによる福音書」のページに、「14:62 ではイエスははっきりと自分がメシアであることを宣言。」と書いてあるのを発見した。この件についても 5 番目の項目として検討する。

### 【ここで紹介する様々な聖書翻訳】

- ・日本聖書協会「口語訳」(新約 1954 年、旧訳 1955 年)  
古今最高の英語訳 RSV に依存しているとされるが、RSV の「You have said so.(= Du sagest's.)」を「お前の言う通りだ」という意味に解釈している。
- ・日本聖書協会「共同訳」(1978 年、新訳のみ)  
アメリカ聖書協会の TEV (Today's English Version、自由に現代的に意識) に影響された酷いものだったので批判が強く、旧約は作られなかった。しかし注釈付きで、講談社学術文庫に入った。しかし Du sagest's. の部分は「それはあなたが言ったことです」と訳されており、この訳はその後の聖書協会の 2 つの訳にも受け継がれている。

- ・日本聖書協会「新共同訳」(1987年)  
前記「共同訳」への批判を反省して、すぐに新しい翻訳を旧約込みで出したもの。注釈無し。  
Du sage's.はいいとしても、口語訳・共同訳で「らい病」と訳していたハンセン病のことを「重い皮膚病」と訳している。
- ・「日本聖書協会共同訳」(2018年)  
30年ぶりの聖書協会による訳である。Du sage's.は「それはあなたが言ったことだ」だが..  
しかし、この発刊に関して日本聖書協会のサイトの広告解説が読める。その冒頭を引用する。  
[https://www.bible.or.jp/transl\\_website/doc/new\\_project/kyoukai02.pdf](https://www.bible.or.jp/transl_website/doc/new_project/kyoukai02.pdf)  
過去の聖書翻訳の歴史には、意識がふさわしい、あるいは直訳がふさわしいという対立がありました。この度の聖書翻訳では、スコポス理論という枠組みを取り入れました。それは意識か直訳かということではなく、読者対象と目的(ギリシア語で「スコポス」)に合わせて翻訳をすべきであるというものです。(中略)そこでこの度の聖書翻訳は、礼拝で朗読される聖書を目的(スコポス)としました。  
つまり学術的な直訳ではないよ、と宣言したようなものだ。その後に訳の特徴が列挙されていて、これがまたツッコミ処満載である。曰く、「はしため」は差別的だから「仕え女」にしたとか、「サファイヤ」と訳していたものは「ラピスラズリ」だと分かったのでそうしたとか...。  
しかし「らい病」に関しては何も書いていない。その訳は何と!!「規定の病」!!である。「差別するべしと規定されていた病」ということか?!
- ・新改訳聖書刊行会「新改訳」  
日本国際ギデオン協会の無料配布版。日本聖書刊行会による1988年発行と記載されている。  
その初版は1973年である。「聖書を『誤りなき神のみことば』と告白する福音主義の立場に立つ」とある。後述の通り、福音主義とは原理主義(ファンダメンタリズム)と同義である。
- ・田川建三氏による翻訳『新約聖書 訳と註』全8巻  
日本が世界に誇る最高の聖書学者による正しい(ギリシア語原典に忠実な)翻訳である。  
(余談だが、彼が2018年聖書協会共同訳に対してどういう批判をするか、すごく楽しみである。)
- ・欽定訳(1611, KJV, King James Version, Authorized Version)  
古い権威ある英語訳で、ヘンデル「メサイア」の歌詞の元はこれである。  
King James Version(KJV、<https://www.biblestudytools.com/kjv/>)というサイトで読める。  
このサイトだと、RSVやルター訳1912年版、その他フランス語版などもメニューで選べるようだ。  
この欽定訳が19世紀後半から聖書学の進展とともに、RV(Revised Version、1880年)、ASV(American Standard Version、1901年)をへて、次のRSVとなっていく。
- ・RSV(Revised Standard Version、改訂標準英語訳1952年)  
現在、最高の英語訳聖書である。 <https://quod.lib.umich.edu/r/rsv/browse.html> で読める。
- ・New King James Version(NKJV、1983年)  
日本国際ギデオン協会が配布していた聖書に載っている英語版。  
これは、昔の欽定訳を現代英語に直したもので、若干原理主義的になっている。
- ・ルター聖書1710年版  
<https://jesus-is-lord.com/germtoc.htm> このサイトの「Text der unrevidierten Lutherbibel 1545」、つまり「未校訂のルター聖書テキスト」という表題は“偽りあり”である。Wikipediaの「ルター聖書」の項から同サイトへのリンク先説明には、「ルターの手による最終的なテキストと同じではなく、1710年のカンシュタイン聖書会議によるものである」と書いてある。バッハ時代の訳である。  
以下のドイツ語訳は、いずれも「Bibel-Online.net」 <http://www.bibel-online.net/> というサイトで読める。
- ・ルター訳1545年版(Luther 1545 Letzte Hand)  
これがルターの最終稿。ドイツ語の“古文”である。このサイトのページにバグがあり読みづらい。
- ・ルター訳1912年版(Luther 1912)  
これと上記「1710年版」とを比べても、文章構成は全体的にほぼ同じのようだ。
- ・Neue Evangelische(新福音主義)  
「福音主義」は、本来は宗教改革の立場をとる、という意味であった。

しかし現代においては、聖書の言葉＝福音を重視するあまり、原理主義（ファンダメンタリズム）と化した人々を指す。このドイツ語訳も、期待に違わぬ原理主義的翻訳となっている。

・ Interlinearübersetzung (逐語訳)

Interlinear は「行間の」という意味なので、「翻訳」(Übersetzung)と合わせて、“行間を読んだ大胆な意識”のことなのかな、と思ったら大間違い。その正反対で、行間に単語1つ1つの意味を付けていく「逐語訳」という意味である。ギリシア語の原文に忠実に訳したものと期待して良いか。

【Du sagest's.の検証】

検討項目は以下の5点

1. マタイ第26章63-64 大祭司の尋問に対して(「マタイ受難曲」第36曲a)
2. マタイ第27章11 総督ピラトの最初の質問(「マタイ受難曲」第43曲)
3. マタイ第26章25 最後の晩餐でユダに対して(「マタイ受難曲」第11曲)
4. ヨハネ第18章37 ピラトの尋問に対して(「ヨハネ受難曲」第18曲、2. に対応する場面)
5. マルコ第14章62 大祭司の尋問に対して(1. に対応する場面)

1. マタイ26章63-64 大祭司の尋問、バツハ「マタイ受難曲」第36曲a

「マタイによる福音書」では第16章で、イエスは「あなたは生ける神、キリストです」と答えたペテロを大変褒めている。しかしもとの話は「マルコ福音書」第8章の同じ場面、「あなたはキリストです」と答えたペテロをイエスは戒めた(叱った、と訳すべきギリシア語が使われている)である。そしてこれはイエスの真実の台詞である。「あなたはキリスト」と言われたイエスが、それを否定したという内容を、キリスト教会がわざわざ捏造するはずがないからである。

「マタイによる福音書」はイエスの事跡を改竄した書物であり、そこに登場するイエスならば、「お前は神の子・キリストなのか」と問われたら、ハッキリ「その通りだ」と答えないと首尾一貫性がない。

しかし、マタイは「それはお前が言ってることだ」としか訳せない言葉を使っている。マタイはマルコをいろいろ改変しているが、基本的にはマルコのストーリーをいただいているし、完全に丸写しの所もある。紙すらなかった古代社会のことだ。現代のように電子ファイルでホイホイ改竄できてしまう時代ではなかったのである。(様々な古代史料も皆そういうところがある。そこから史実を読み解くのが歴史家というものなのだ。)

ルター訳1710年版 = バツハの受難曲の歌詞

Und der Hohepriester antwortete und sprach zu ihm:

Ich beschwöre dich bei dem lebendigen Gott, dass du uns sagest, ob du seiest Christus, der Sohn Gottes.

Jesus sprach zu ihm: **Du sagst es.** Doch sage ich euch: Von nun an wird's geschehen, dass ihr sehen werdet des Menschen Sohn sitzen zur Rechten der Kraft und kommen in den Wolken des Himmels.

KJV And the high priest answered and said unto him, **I adjure thee by the living God**, that thou tell us whether thou be the Christ, the Son of God. Jesus saith unto him, **Thou hast said:** nevertheless I say unto you,...

RSV (大祭司) "**I adjure you by the living God**, tell us if you are the Christ, the Son of God."  
Jesus said to him, "**You have said so.** But I tell you, hereafter you will see the Son of man seated at the right hand of Power, and coming on the clouds of heaven."

田川訳 大祭司が彼に言った。「**生ける神に誓って、お前に言う、我々に答えよ。お前は神の子キリストであるのかどうか。**」イエスは彼に言う、「**あなたがそう言っておいでなのだ。**むしろ私はあなた方に言う、今から後あなた方は人の子が力(=神)の右に座し、天の雲の上ののって来るのを見るであらう。

新共同訳 (大祭司)「**生ける神に誓って我々に答えよ。**お前は神の子、メシアなのか。」  
イエスは言われた。「**それはあなたが言ったことです。**しかし、私は言うておく。～」

しかし、古い翻訳、あるいは原理主義的な翻訳では、「お前の言う通りだ」となっている。

NKJV (大祭司) "**I put You under oath by the living God:** tell us if You are the Christ, the Son of God!"

Jesus said to him, "It is as you said. (お前の言う通りだ) Nevertheless, I say to you,...."

口語訳 (大祭司)「あなたは神の子キリストなのかどうか、**生ける神に誓ってわれわれに答えよ**」  
イエスは彼に言われた。「**あなたの言うとおりで**ある。しかし、私は言うておく...

新改訳 (大祭司)「**私は生ける神によって、あなたに命じます**。あなたは神の子キリストなのか、どうか。  
その答えを言いなさい。」  
イエスは彼に言われた。「**あなたの言うとおりで**です。なお、あなた方に言うておきますが、...

## Neue Evangelische

Darauf fragte ihn der Hohe Priester noch einmal: "**Ich beschwöre dich bei dem lebendigen Gott:**  
Bist du der Messias, der Sohn Gottes, oder nicht?"  
"**Ich bin es!**" (私はまさにそれだ!), erwiderte Jesus. "Doch ich sage euch: ...."

この場面、大祭司に「神の子か」と聞かれたイエスは、「Du sagest's.」と答えた後、「**人の子が力ある方の右に座し、天の雲に乗ってくる**」と言っている。これをキリスト教原理主義的に読めば、Du sagest's.を「その通りだ」と訳したくなるのだろう。

しかしながら、「神の子か」と聞かれて「**人の子**」と答えている。だから Du sagest's.の後の接続詞は逆接なのだ。

この部分は、イエスがユダヤ教幹部たちを前に挑発的に語った言葉である。

「**お前たちは私を神の子とか言ってるが、そんなことは知ったことじゃないよ。でもお前たちは既に私を逮捕して、死刑にしたいんだろ。だったら言うてやるよ。**」ということだ。

もちろん史実としてイエスがそう語った、というのではない。彼の物語の伝承の過程で「イエスってこういう言い方する人だったよね」ということで付加された台詞であろう。

ここには、「安息日のために人がいるのではなく、人のために安息日があるのだ。」「安息日に許されているのは善を為すことか、悪を為すことか。」等々、ユダヤ教に対してとことん挑発するイエスの性格が表れている、と考えるべきだろう。

もう1つ、この場面では、赤字にした「Du sagest's.」問題とは別の問題がある。青字にした大祭司による詰問の日本語訳である。

ドイツ語訳・英語訳を読む限り「生ける神に誓って言う」の主語は大祭司自身のはずである。しかし日本聖書協会による「口語訳」「新共同訳」などは、大祭司がイエスに対して「生ける神に誓って答えよ」と命令する形になっている。何となく“通りが良い”のはわかるが、文法的にはおかしい。

田川建三氏の訳が大祭司を主語にしているのは当然として、もう1つそう訳しているのが何と「新改訳」だというのは意外である。

## 2. マタイ第27章11 総督ピラトの最初の質問 バツハ「マタイ受難曲」第43曲

これも1. と同じような場面であるから、訳の傾向も全く同じである。

### ルター訳(1710) バツハの受難曲

Und der Landpfleger fragte ihn und sprach: Bist du der Juden König?  
Jesus aber sprach zu ihm: **Du sagst es.**

RSV .. and the governor asked him, "Are you the King of the Jews?" Jesus said, "**You have said so.**"

田川訳 そして代官が彼に尋ねて言った「**汝はユダヤ人の王であるのか**」。  
イエスは言った、「**あなたがそう言うておいでなのだ**」

新共同訳 総督がイエスに「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは  
「**それはあなたが言っていることです**。」と言われた。

これに対し、古い訳や、原理主義的な訳では「あなたの言う通りだ (=私はユダヤの王だ)」となる。

NKJV And the governor asked Him, saying, "Are You the King of Jews?" Jesus said to him, " **It is as you say.**"

口語訳 すると総督はイエスに尋ねて言った「**あなたがユダヤ人の王であるか**」。  
イエスは「**そのとおりで**ある」と言われた。

新改訳 すると総督はイエスに「あなたはユダヤ人の王ですか」と尋ねた。  
イエスは彼に「**そのとおりです**」と言われた。

### Neue Evangelische

Als Jesus dem Statthalter vorgeführt wurde, fragte ihn dieser: "Bist du der König der Juden?"  
- "Ja, es ist so, wie du sagst", erwiderte Jesus.

しかし、キリスト教の教義として、「ユダヤの王か」と聞かれて「そうだ」と答える、つまりユダヤの王を自称するイエス像というのは、あり得ないのではなかろうか？

### 3. マタイ 第26章25 最後の晩餐 バツハ「マタイ受難曲」第11曲

この場面は前2つとは全く場面が異なる。

最後の晩餐の席上、イエスは「この中に裏切り者がいる」と宣言する。弟子達が口々に「主よ、私ですか？」と言う。最後にユダが「私ですか？」と言うと、イエスが「Du sagest's.」と答えるのである。

ここはイエスも、裏切り者がユダであると分かっているのだから「その通りだ」と答えて全くおかしくない。にもかかわらず、ルター訳では「お前がそう言っている」なのである。

### ルター訳(1710) バツハの受難曲

Da antwortete Judas, der ihn verriet, und sprach: Bin ich's, Rabbi?  
Er sprach zu ihm: Du sagst es.

他の訳はどうなっているか。ここではまず、古かったり、原理主義的だったりするものを先に見る。

### Neue Evangelische

Da sagte auch Judas, der Verräter, zu ihm: "Ich bin es doch nicht etwa, Rabbi?"  
- "**Doch**", antwortete Jesus, "**du bist es.**"(いや、あなただ。)

口語訳 イエスを裏切ったユダが答えて言った。「先生、まさか私ではないでしょう。」  
イエスは言われた。「**いや、あなただ。**」

新改訳 するとイエスを裏切ろうとしていたユダが答えて言った。  
「先生、まさか私のことではないでしょう。」 イエスは彼に「**いや、そうだ。**」と言われた。

場面が場面だけに、躊躇無く勝手な意識＝誤訳を行っている。しかし、英語の欽定訳は次の通り。

KJV Then Judas, which betrayed him, answered and said, Master, is it I?  
He said unto him, **Thou hast said.**

NKJV Then Judas, who was betraying Him, answered and said, "Rabbi, is it I?"  
He said to him, "**You have said it.**"

RSV Judas, who betrayed him, said, "Is it I, Master?" He said to him, "**You have said so.**"

以外にも NKJV ですら「You are right.」とか「It is as you say.」などしていない。

### 新共同訳

イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで「先生、まさか私のことでは」と言うと、  
イエスは言われた。「**それはあなたの言ったことだ。**」

さて文法的に正しく直訳したのはいいが、これだとどういう意味・文脈で解釈すべきかよく分からない。  
これを、日本が誇る世界最高の聖書学者 田川建三はどう訳したか。

田川訳 彼を引き渡そうとしていたユダが答えて言った、「ラビ、まさか私ではないでしょうね。」  
彼に言う、「**おまえがそう言うのか。**」

何と、平叙文を慨嘆の疑問文として訳している。比類無い名訳だ。  
「(既に裏切った) お前が、ここでそう言うのか...」という感じであろう。



私は、マタイ受難曲でこの場面を知ってから、長いこと次のような疑問を抱いていた。「イエスに『裏切者はお前だ』と言われたユダが、その後の最後の晩餐の席に留まっていたらどうか？」と。福音書にはその後ユダが退席したとは書かれていないのだ。

この場面の文脈を正しく理解するには、その直前のイエスの言葉から見なくてはならない。

イエスは晩餐の席についてまず、「この中に裏切者がいる」と言う。すると弟子たちが口々に「主よ、私ですか」と言う。イエスは続けて「**その者にとって良かったのは、生まれてこなかったのだ**」という、かなり厳しい言葉を吐く。その後ユダが「先生、私ですか」と言い、イエスが「Du sagest's.」と答える。

もしこの Du sagest's. が「その通りだ」という意味だったら、「生まれてこなければよかった裏切者はお前だ」と言ったことになる。これではあまりに冷酷なイエス像になってしまう。福音書の著者がそんなことを書くだろうか。

ところが田川訳だと、この疑念が全て解決し、全体の文脈が見えてくる。

イエスはユダの裏切りに感じていたし、自分の行ってきたことの過激さを思えば、当然そういう裏切者が身内から出ることもあり得ると意識していた。そしてその裏切者も最終的には悲惨な運命をたどるであろうことも分かっていた。だからこそ、その彼の行く末を思い、「**彼にとってより良かったのは生まれてこなかった。(かわいそうに。)**」という台詞を吐いた。

しかしその後、よせばいいのにユダが周りの弟子たちに続けて「私のことですか」と言う。イエスはここで、皆の前で「その通りだ」などとはとても言えるわけがない。「お前がそう言うのか....」と、憐れみとも呆れとも何ともつかない表情で答えた。そういうことだろう。

ところで、バッハはこの田川訳のようなニュアンスを感じ取っていたのではないだろうか。

彼はここの「Du sagest's.」にだけは、他の場面とは違って、Du から sa-gest's に向かって「レーソーソー」と4度の上昇音型で作曲しているのだ。(他の2カ所では5度、4度の下降音型である。) さらに弦の伴奏も、決然たるカデンツではなく、むしろ事をウヤムヤにするような後奏がついて、そのまま晩餐の場面につないでいるようにしか聞こえない。

だが礒山雅氏は『マタイ受難曲』で、ここの訳は「お前の言う通りだ」でよい、とした上で、「ここでのバッハの音楽も、曖昧な含みを残していないなどと書かれている。大家に対して失礼を承知で言わせてもらえば、少なくともこの場面に関しては、礒山氏はバッハの音楽から何を聞いているのか甚だ疑問である。

さらに付け加えると、もしイエスが「そうだ。お前だ。」と言ったら、それはイエス・グループにとっては決定的な出来事であるから、**バッハがこの場面の直後にアリアかコラールのどちらかを挿入しないわけがない。**

またバッハは、後のほうでユダが後悔して自殺した所では、**ユダを「ルカ福音書」第15章に出てくる放蕩息子になぞらえた歌詞のアリアを付けて、ユダを“救済”している**のである。よって、バッハが理解した福音書の物語の解釈は上記のようなものであったに違いないと考える。

#### 4. ヨハネ第18章37 ピラトの2回目の「王なのか」という質問に対して

本稿の懸案事項である。「Du sagest's, ich bin ein König.」は、ギリシア語からの正しいドイツ語訳なのか。(ちなみに、ここは「マタイ 27:11」=検討項目 2. に対応する場面である。)

##### ルター訳(1710) バッハの受難曲

Da sprach Pilatus zu ihm: So bist du dennoch ein König?

Jesus antwortete: **Du sagst es, ich bin ein König.** Ich bin dazu geboren und in die Welt kommen, daß ich die Wahrheit zeugen soll. Wer aus der Wahrheit ist, der höret meine Stimme.

「**あなたが言う(その通り)私は王である。**私は真理を示すために、生まれ、この世に来たのだ。真理からの者は私の声を聞く。」

前述の通り、イエスの返答は間に**接続詞が無い**ので、上のように訳すしかない。

1545年のルター最終稿も「Jhesus antwortet / Du sagsts / Jch bin ein Konig.」となっている。

古い翻訳や原理主義的翻訳では、ここぞとばかり...

##### Neue Evangelische

"Also bist du doch ein König", sagte Pilatus.

"**Du hast Recht**", erwiderte Jesus, "**ich bin ein König**, ich bin dazu geboren.

Und ich bin in die Welt gekommen, um für die Wahrheit einzustehen.~"

「お前は正しい」とイエスは答えた。「私は王であり、私はそのために生まれてきたのだ。私は、真理を保証するために、この世に来た。～」

いったいどこから **Recht** なんて言葉を持ってきたのか？ 続く文も、切り方を変えて、「王となるために生まれてきた」としている。

NKJV Pilate therefore said to Him, "Are You a King then?"  
Jesus answered, "**You say rightly that I am a king.**～  
(あなたは、私が王である、と正しいことを言っている。)

that 節で括ったのはいいが、say rightly ときたか。

口語訳 そこでピラトはイエスに言った、「それでは、あなたは王なのだな」。  
イエスは答えられた、「**あなたの言うとおり、私は王である。**～」

新改訳 そこでピラトはイエスに言った。「それではあなたは王なのですか」  
イエスは答えられた。「**私が王であることは、あなたの言うとおりです。**～」

しかし学術的な訳は、やはり以下のようにthat節として訳している。

RSV Pilate said to him, "So you are a king?" Jesus answered, "**You say that I am a king.** ～"  
(おまえが、私が王である、と言っているのだ。)

ここで驚きなのが、古い欽定訳 KJV だ。

KJV Jesus answered, **Thou sayest that I am a king.**

これでは全く RSV と変わらない、正しい翻訳である。ルターの改竄に付き合っていない。ここでも、NKJV のほうが、より原理主義的になっていることがわかる。

新共同訳 そこでピラトが「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。  
「**私が王だとは、あなたが言っていることです。**私は真理について証しをするために生まれ、そのために世に来た。真理に属する人は皆、私の声を聞く。」

田川建三訳 それでピラトが言った、「では汝は王ではないのか」  
イエスが答えた、「**私が王だというのは、あなたが言っておいでのことだ。**～」

Interlinearübersetzung (逐語訳)

Da sagte zu ihm Pilatus: Also doch ein König bist du?  
Antwortete Jesus: **Du sagst, daß ein König ich bin.** ～

やはりここは **daß** 節で括るべきなのだ。「私が王だ、とはお前が言ってることだ。」

というわけで、この場面も、マタイの尋問 2 カ所と同様に「私が王だとはお前が言ってることだろ」と捨て台詞的に訳するのが正しい。

ここで、この場面をもう少し前からピラトとイエスのやり取りをたどってみよう。

ピラト「お前はユダヤ人の王なのか？」

イエス「あなたは自分自身でそう言っているのか、それとも誰か別の者が私についてあなたにそう言ったのか？」

ピラト「私がユダヤ人（のような人間だというのか）？ お前の民族と祭司長たちは、お前を私に引き渡した。

お前は何をしたのだ？」

イエス「私の国はこの世のものではない。もし私の国がこの世のものだったならば、私の従者たちが戦って私がユダヤ人に引き渡されないようにするだろう。しかし今は、私の国はここには無い。」

ピラト「それではやはりお前は王なのか？ So bist du dennoch ein König?」

おそらくルターは、ピラトの最後の質問が「ユダヤの王なのか」ではなく、「王 ein König なのか」というものだったのを承けて、ここでイエスに「私は王だ」と語らせてみたかったのであろう。(ルターは決して正しい翻訳に徹した人ではない。こういう改竄もたくさんしている。)

## 5. マルコ第14章-62 大祭司から「キリストなのか」と聞かれたイエスが「私がそうだ」と答えている件

「マルコ」第14章61-62節の翻訳は次のようになっている。

ルター訳 Da fragte ihn der Hohepriester abermal und sprach zu ihm: Bist du Christus, der Sohn des Hochgelobten? Jesus aber sprach: **Ich bin's**; und ihr werdet sehen des Menschen Sohn sitzen zur rechten Hand der Kraft und kommen mit des Himmels Wolken.

### Interlinearübersetzung (逐語訳)

Wieder der Hohepriester fragte ihn und sagt zu ihm:  
Du bist der Gesalbte, der Sohn des Hochgelobten? Aber Jesus sagte: **Ich bin** und ~

RSV Again the high priest asked him, "Are you the Christ, the Son of the Blessed?" And Jesus said, "**I am**; and you will see the Son of man seated at the right hand of Power, and coming with the clouds of heaven."

新共同訳 「お前はほむべき方の子、メシアなのか？」と（大祭司は）言った。イエスは言われた。「**そうです**。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」

現在、ギリシア語聖書の原典とされているのは「ネストレ」と呼ばれるものである。聖書学の進歩とともに改訂が繰り返され、現在は1979年の第26版となっている。

その「ネストレ」の原文が上記のようになっており、全世界でそのように訳されているのである。

だが田川建三氏は、このイエスの台詞を、「**私がそうだということは、お前が言っていることなのだ**」と訳されている。（『新約聖書 訳と註 1 マルコ福音書/マタイ福音書』）

田川氏はここで、「ネストレ」を“底本”として扱ってはいない。「ネストレ」原文を確定した聖書学者たちが行ったのと同じ史料批判（正文批判）を、自らも行き、その成果としてこのように訳したのである。

**聖書学という学問には“底本”という概念は無い。「ネストレ」も金科玉条ではないのである。**

以下、田川建三著『書物としての新約聖書』からのまとめである。

聖書の原資料たる古い写本には、いくつかの系統がある。

有力な考え方として、「アレクサンドリア型 ヴァチカン写本(B)・シナイ写本(α)等」と「西方型 ベザ写本(D)等」の一致が見られれば、それが正文だろうということになっている。

しかし、「マルコ福音書」のみに見られる「カイザリア型 コリデティ写本(Θ)等」というのがあって、同福音書においては、「アレクサンドリア型・西方型」と「カイザリア型」が対立した場合、「カイザリア型」を優先すべき場合も多いという。

ではこの部分において、古写本はどうなっているのか。田川氏の『訳と註 1』の解説によれば、

- ・「カイザリア型」……「私がそうだということは、お前が言っていることなのだ」(that 節従属文の形)
- ・「アレクサンドリア型・西方型」……「私はそうだ」(「お前が言っていることだ」を削除した形)

ギリシア語「ネストレ」は後者を採用しているのだが、しかし、それが正しいのか?!。

ここで、「マルコ 14:61-62」に対応する並行記事は「マタイ 26:63-64」、つまり今まで検討してきた項目の1だ。その「マタイ」では「**お前がそう言っているのだ**」となっている。

マタイ著者はイエスのことを「予言されていた救世主」であると考えている人物だ。その彼が「マルコ」を脇に置いて引き写しながら、それに自分の思想を盛り込んで「マタイ」を書いたのだ。

その彼が、「マルコ」にイエスの台詞として「私はそうだ(メシアだ)」(アレクサンドリア型・西方型)と書いてあるのを見たら、“我が意を得たり”と思ってそのまま書き写すだろう。それを“わざわざ削除して”、さらに、自分の考えにそぐわない「お前がそう言っているのだ」に書き換えるなどということは絶対にあり得ない。

マタイ著者が見ていた「マルコ」は「カイザリア型」だった。すなわち「私がそうだということは、お前が言っていることなのだ」と書かれていたはずだ。これを見てマタイ著者が「私がそうだということは」を削除したのは、単に重複を避けるためだったと考えれば説明がつく。



よって田川氏の措置が正しい。この部分における「ネストレ」の措置は歴史学の原則に反している。  
ある集団が作成した記録に  
「彼らにとって不利なことが書かれている場合は、おおむね信用できる」  
「彼らにとって有利なことが書かれている場合は、真実かどうかよく検討しなくてはならない」  
のである。

## ※番外編 「ルカによる福音書」の2カ所

さて、最後に唯一ここまで話題に上らなかった「ルカによる福音書」についても見てみることにする。同福音書で、イエスが「それはあなた(たち)が言っている」と言うのは次の2カ所である。訳の特徴が、今まで検討してきた通りであることがわかる。(赤が学術的な訳、青が古い訳・原理主義的訳である。)

### 「ルカ福音書」第22章67-70……並行記事「マタイ26:63-64」(=検討項目1.)

新共同訳 (最高法院)「お前がメシアなら、そうだと言うがよい」と言った。  
イエスは言われた。「私が言っても、あなたたちは決して信じないだろう。  
私が尋ねても決して答えないだろう。しかし今から後、人の子は全能の神の右に  
座る」そこで皆の者が、「では、お前は神の子か」と言うと、イエスは言われた。  
「私がそうだという事は、あなたたちが言っている。」  
⇔口語訳「あなたがたの言う通りです。」

RSV "Are you the Son of God, then?" And he said to them, "You say that I am."

KJV Then said they all, Art thou then the Son of God?  
And he said unto them, **Ye say that I am. (=You say that I am)**  
私がそうだととは、あなたが言っていることだ。

KJV は正しく訳しているのに対し、NKJVは  
"You rightly say that I am." と原理主義的翻訳に墮している。

ルター1710 Bist du denn Gottes Sohn? Er sprach Zu ihnen: **Ihr saget es, denn ich bin's.**

ここで、ルターは「ヨハネ 18:37」と同じ処置をしている。  
すなわち、「神の子か」と聞かれたイエスに「そうだ」と答えさせたいが故に、  
本来なら **dass** という接続詞であるべきところを、**denn** にしているのだ。  
ルターの改竄の腕の見せ所である。

### 「ルカ福音書」第23章3節……並行記事「マタイ27:11」(=検討項目2.)

新共同訳 そこでピラトがイエスに「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、  
イエスは「それはあなたが言っていることです」とお答えになった。  
⇔口語訳「その通りです。」

ルター1710 Pilatus aber fragte ihn und sprach: Bist du der Juden König?  
Er antwortete ihm und sprach: **Du sagest es.**  
ここはルターも正しく直訳しているだけだ。

KJV And Pilate asked him, saying, Art thou the King of the Jews?  
And he answered him and said, **Thou sayest it.**  
KJV も正しく直訳しているが、NKJVはやはり "It is as you say." だ。

RSV "Are you the King of the Jews?" And he answered him, "You have said so."

以上。これで、イエスは全ての福音書の尋問の場面で、「お前は王なのか」「キリストなのか」と聞かれても、「それはお前が言ってるんだろ」と捨て台詞で応答した、ということが確認できた。